

「新しい定時制高校創設プロジェクト」第1回有識者会議 会議概要

- 1 日 時 平成26年12月19日 金曜日
開会 10時00分 閉会 11時30分
- 2 場 所 京都市総合教育センター 第2研修室
- 3 会議メンバー (有識者) 竹田契一氏, 伊藤一雄氏, 水野篤夫氏, 前田敏也氏
(冒頭挨拶) 清水教育委員会指導部担当部長
(プロジェクト委員) 西田委員, 村上委員, 田中委員, 鳥羽委員, 辻浦委員, 山本委員, 中塚委員, 東原委員, 畑委員, 酒崎委員, 谷口委員
- 4 傍聴者 6人
- 5 会議の概要
 - (1) 冒頭挨拶 (教育委員会 清水指導部担当部長)
 - (2) 有識者紹介 (教育委員会)
 - (3) 「京都市立定時制単独高校の創設に関する基本方針」に関する説明 (教育委員会)
配布資料「京都市立定時制単独高校の創設に関する基本方針」により説明
 - (4) 「京都市立定時制高校(伏見工業高校・西京高校)」に関する説明 (両校副校長)
配布資料「市立夜間定時制高校の概要」「西京定時制と伏見工業夜間定時制の比較」
及び両校の学校案内により説明
 - (5) 「新しい定時制高校創設プロジェクト」に関する事務局説明・協議
 - ア 説明 (教育委員会)
配布資料「第2回 新しい定時制高校創設プロジェクトでの主な意見(概要)」により説明
 - イ 主な意見 (○は有識者, ●はプロジェクト委員)
 - 定時制教育は, 戦後から高度経済成長期を迎えるまで, 中学校卒業後に働きながら夜間定時制高校に学ぶ生徒がほとんどであったが, 現在, 高校進学率がおおよそ98%となる中, 定時制高校は学業不振の生徒のみならず, 不登校経験や発達障害など生徒の学びの場となるなど状況は変化してきており, 今後も多様な生徒を受け入れることが必要となっている。同時に, 生徒が自分の学校に誇りを持てるような学校づくりが何

より大切である。

- 来年度に京都府が開校する定時制の清明高校は、現時点での中学3年生の進路希望調査によると、定員を大きく上回る希望があったが、現在、定時制高校に進学している生徒以外の生徒層が多く希望していると聞いており、本来対象とすべき不登校や学業不振などの問題を抱える生徒が入学できないのではないかと危惧している。
- 今回、創設する定時制高校は、同じ京都市立である中学校との連携の強化が可能であり、生徒のニーズにあった学校づくりを進めてほしい。例えば、不登校の生徒を対象として洛風や洛友中学校との接続も検討すべきである。また、総合支援学校では事前の教育相談や体験入学等による適切な就学指導を行っており、入学後のミスマッチを防ぐため、一回の選抜試験だけによらない柔軟な入試方法を是非考えて欲しい。

- 様々な問題や悩みを抱える生徒のためにも、定時制教育に光を当てていくことは、とても大切である。そのためにも新しい学校では、どのような生徒を求めるかを明確にすることが重要である。

また、現在の両校の中途退学の状況と理由と、現在、そうした生徒たちも入学している広域通信制高校の現状を教えてほしい。

- 伏見工業高校では、一学年の定員が160名だった昔は半数が中退していた時代もあったが、定員30名の現在では5～7割近くの生徒が卒業しており、中退の理由としては、学業不振の面よりも、不登校による欠席超過が最も多い。
- 西京高校は、2年進級時の中退が最も多い。その進級率は6～7割程度であり、進級できなかった生徒のうち半数は自主退学している。その主な理由は、生活習慣のリズムが作れずに学校に来なくなった、またアルバイトに専念するなど進路変更によるものである。
- 市立高校全体の年間の中退率は、定時制で約10%、全日制で約1%となっており定時制は高く、全体的な理由としては学校生活への不適應やアルバイトや広域通信制高校などの進路変更が多い。
- 本市に所在する広域通信制高校については、市内中心部のサテライト校も含めると、10校を超える。本市では、約1万500人の中学卒業生のうち、600名弱が定時制・通信制（公私問わず）に進学し、うち、300名強が広域通信制である。

- 京都市は子どもパトナ、洛風・洛友中学校や総合支援教育など全国に先駆けて様々な取組を行っている中、基本方針の内容もしっかり定まっている新校にも大いに期待している。

不登校の生徒の半数は発達障害（学習障害、不注意・多動性、自閉症など）ではないと言われ、残りの半数は学業不振などによるものと考えられている。

一方、昔、共同研究を行っていた宇治少年院の入所者は、LD等の発達障害よりも、

大半が小学校4年生レベルまたはそれにも満たない「誤学習・不足学習・未学習」による学力不足の子どもが大半であった。

このような多様な生徒の学びの場が必要とされている中、高校だからと言って、文科省の高校学習指導要領のみに縛られることなく、学び直しができるしっかりした学習支援を行っていくため、特区や研究指定も活用し、生徒のレベルに合わせた授業を展開していく必要があると考えている。勉強がわかると生徒や先生もどんどん良い方向に変わっていくはずである。

生徒の多様化は避けられず、課題も山積しているが、まずは生徒の学習保障が絶対不可欠であり、そのような学校づくりを進めてほしいと願っている。

(6) 閉会挨拶（教育委員会 畑学校指導課担当課長）